

シチズンシップ教育

子どもの幸福度No.1のオランダの教育から学ぶ

静岡市立清水入江小学校 主幹教諭 五十畑 美濃

文部科学省は、「自己肯定感や学習意欲、社会参画の意識等が国際的に見て低いこと」を日本の学校教育の課題としてあげている。一方、オランダは、子どもの幸福度調査で連続第一位に輝いている。シチズンシップ教育が根付いているオランダの教育を視察し、将来、主体的に社会参画できる子どもを育てたいと考え、本研修を志した。

オランダの学校視察

研修では、保育園、小中学校、ワイドスクール、教育博物館等、8つの施設を視察し、教育専門家と交流する機会に恵まれた。その過程で、「ぜひ私たちの学校を批判的に見て、意見を述べてほしい。」と求められたことが強烈な印象として残っている。

「違いこそがグループと個人を豊かにする」という考えで「違い」を大切にしているイェナプラン校では、学級は3つの年齢から構成されている。子どもたち自身が「教える」⇔「教わる」関係を構築することを、将来、相手の立場を理解して行動するための準備と考えている。異年齢学級は同年齢学級に起こりがちなできる子・できない子の固定化を防ぐことにもなり、子どもの個性や真の意味のリーダーシップを生むそうだ。

フレイネ校では、「民主的な市民になる」ため、①子ども自身が自分で物事

を決める ②世界で起きていることに主体的に考えをもつ ③お互いに尊重し合うの3点を大切にしていた。様々なことを批判的に見て、自分の意見を形成できるようにしていると感じた。

子どもの幸福度の背景にあるもの

幸福度の背景にあるものとして、まず、家庭が子どもにとって安心できる居場所になっていることをあげたい。ワーキングシェアリングにより、親は、仕事と家庭のバランスを考えて働き方を選び、その結果、家族の時間を大切にすることができている。

次に、人をランク付けしないという価値観。これは、適材適所を実現することにつながる。

そして、「サイズに合った教育」。オランダでは、個に応じた教育のことをそう呼ぶ。「学校が100あれば、100の違う教育をやっている」と言われるように、オランダの教育の理念や方法は実に



オランダ語の授業。本物を使って言葉を習得する

多様だ。しかし、視察をする中で、個を大事にすることはどの学校でも共通していた。「学校教育とは、子どもが自分をよく知り、よさを伸ばし、社会の発展に積極的に関わられるための人間形成の場である」ことが、根底にあるのだ。

「違いこそチャンス」

同質を好み、違いを恐れる傾向がある日本の子どもたちには、「自分と違う立場や違う考えの人から、人は多くのことを学ぶことができる」ということを、実感させたい。授業や生活の中で、対立する意見をぶつけ合うこと、多様な視点の意見を意図的に取り上げること、誤答であっても否定せず話し合いの論点として生かすこと等に取り組み、よりよい考えに到達する経験を積ませたい。こうした積み重ねが、自分なりの意見や立場をもち、同時に、違う意見や立場の人を理解し尊重できる市民を育成することにつながると考える。



子ども同士の学び合いを大切にしたい異年齢学級

情動調整に視点を当てることによる、教育的ニーズのある子どもたちの能動的な参加を目指した支援

アメリカのSCERTS(サーツ)モデルを適用した事例に学ぶ

静岡県立特別支援学校 教諭 深澤 雄紀

研修の目的

近年、自閉症児の中核的な生きづらさの一つは、情動調整の弱さであり、それが授業などの学習への参加を阻害していると、情動調整の支援の必要性が指摘されている。本研修の目的は、情動調整を教育的ニーズのある子どもたちの支援において主要な領域として位置づけているSCERTSモデル^{※1}を取り入れたアメリカの学校の視察を通して、日本の特別支援学校における情動調整の支援の実践可能性について考察することである。

※1 SCERTSモデル:プリザント氏らによって開発された、自閉症スペクトラム障害の子どものための包括的教育アプローチ

研修内容

研修先は、アメリカのコネチカット州にある特別支援学校Cooperative Educational Services(CES)で行った。発達段階に応じて3つのクラスの授業参観や職員とのディスカッションを行った。

①CESの教師とのディスカッション

情動調整の視点を取り入れたことによる自分自身の指導観の変容について質問したところ、子どもが調整不全の状態では学びは深まらない。なぜ

調整不全になるのか考えるようになった。情動調整という視点をもちことで、子どもを理解するための手段が増えたと語ってくれた。この発言に対し、他の教師たちも大きくうなずいていた。情動は人の覚醒状態に大きく関係する。人として生きていく中で基本的な生理現象を理解することが教師に求められる専門性であることを議論した。

②SCERTSモデルの校内研修

CESでは教育計画にSCERTSモデルを取り入れているため、SCERTSモデルの研修は必修であった。講義において特に強調されていたことは、SCERTSモデルを活用することで子どもの行動が教師の期待する行動になるというのではなく、SCERTSモデルという枠組みで子どもをみることで、子どもの理解が深まること、何より教師の考えが変容し子どもの状態に合わせて支援を考えていくことが重要であるということであった。



授業の様子

成果

情動調整の支援は、子どもたちが能動的に学習に参加していくための基盤であることが再確認できた。また、日本の特別支援学校においては、自立活動の指導の充実として実践可能であると考ええる。

最後に

「社会は進化していくから人も変化していかななくてはならない。教育も同じように、社会の変化に合わせて変化していく必要がある。」という学校管理者の言葉は印象的であった。私自身、専門職として広い視野をもった学び続ける教師として、これからの教職人生を歩んでいきたいと決意した研修となった。



SCERTSセミナーでプリザント氏との記念写真